

14. 東洋医学会栃木県部会のあゆみ

栃木県部会幹事 越井健司

昭和53年（1973）秋、獨協医大病院で日野原正気管食道科教授と建部守薬剤副部長、北島敏光第一麻酔科助教授を中心とした「漢方勉強会」が誕生した。日野原は栃木県内に関心を持つ医師が多数いることを知り、東洋医学に理解をお持ちの石崎達・獨協医大内科学教授に「漢方研究会」の設立について相談し、昭和56年11月14日に現在の日本東洋医学会関東甲信越支部栃木県部会の前身である栃木県漢方研究会発足に漕ぎつけた。

* 栃木県漢方研究会

昭和57年（1982）第1回栃木県漢方研究会から昭和62年まで石崎が会長を務めた。第13回（昭和63年）から日野原が会長を引き継ぎ、年2回の研究会には毎回中央から識者を招いた特別講演を開催し、参加者の東洋医学への関心を高めた。

平成元年、日本東洋医学会は「関東甲信越支部」を発会し、学術講演会を九県の輪番制とした。平成3年（1991）に「栃木県漢方研究会」から「関東甲信越支部栃木県部会」に移行した。

* 栃木県部会

第1回関東甲信越支部栃木県部会学術集会は平成4年（1992）9月13日国立栃木病院地域医療研修センターで開催された。漢方研究会が発足した昭和57年から日野原が退職する平成9年（1997）3月まで、事務局は獨協医大気管食道科学教室におかれていた。

日野原会長のあとを引き継いで平成9年4月から平成13年3月まで獨協医大麻酔科学教授の北島敏光が県部会長を務めた。この間、平成11年（1999）10月17日栃木県総合文化センターで第56回関東甲信越支部学術総会を主催するなど、本会発展に尽くした。

平成13年（2001）4月から国際医療福祉大学教授の粕田晴之が会長に就くと、県部会学術集会の会場を宇都宮グランドホテルに移し、県部会活性化に向けて手腕を発揮された。その一環として幹事会の若返り、電子メールを利用した通信、一般向けの「市民公開講座」など企画、

実行した。

一般市民向けに「市民公開講座・漢方で元気！」を平成15年から平成25年まで、栃木県総合文化センターで毎年開催した。これには栃木県医師会からも後援を頂いた。「証に合った漢方はどこで処方してもらえるのか？」といった市民からの要望に応じ、県部会のホームページに医療機関、薬局を掲載している。

栃木県漢方研究会から平成16年までの栃木県部会の足跡を記すべく、日野原を中心に金子達（金子耳鼻咽喉科クリニック院長）、越井健司（越井クリニック院長）が編集を担当して「栃木県部会のあゆみ」を平成17年に発刊した。

平成25年（2013）からは金子達が県部会長を引き継いで現在に至っている。現在の事務局は獨協医大麻酔科学教室教授の濱口眞輔が担当している。

平成11年に北島が第56回総会を、平成21年に粕田が第66回総会を主催して以来、10年振りに第76回日本東洋医学会関東甲信越支部総会を令和元年（2019）11月17日宇都宮市文化会館で開催した。この総会において「ターヘル・アナトミア」「解体新書」（復刻版）他の展示を企画した。

平成13年、医学教育のコア・カリキュラムに「和漢薬を概説できる」という項目が入り、各大学でカリキュラムが変更された。現在ではすべての大学において、それぞれの形で漢方医学教育が取り入れられている。東洋医学の研修を希望する医師の受け入れ体制が必要であり、日本東洋医学会の専門医制度の改定に伴って「研修教育施設の整備」が実施された。認定された「教育病院と教育関連施設」の役割は大きい。栃木県では獨協医科大学病院、自治医科大学附属病院、済生会宇都宮病院と栃木県立がんセンターが教育機関として認定されている。